カラヴァッジョ展

札幌市医師会
西尾皮膚科医院　西　尾　千恵子

2019年、８月10日から10月14日まで道立近代美術館で、カラヴァッジョ展が開催されました。ご覧になった先生もおられると思いますが、カラヴァッジョについて紹介させていただきます。

カラヴァッジョは、日本では誰もが知っている画家ではありませんが、ヨーロッパでは、レオナルド、ミケランジェロ、ラファエロといった、ルネサンスの三大巨匠をしのぐほどの認知度と人気を誇っています。

日本では、2001年に１回目のカラヴァッジョ展が開催され、２回目は、2016年、国立西洋美術館で「ルネサンスを超えた男、カラヴァッジョ展」として開催されました。

今回は３回目の日本での開催で、「カラヴァッジェスキ（カラヴァッジョ派）」と呼ばれる、カラヴァッジョに影響を受けた画家たちの作品も同時に多数展示され、彼が当時の画家たちに、いかに大きな影響を与えたかを紹介しています。

カラヴァッジョ（1571－1610　38歳没）はミラノの近郊の町、カラヴァジョで生まれ、北イタリアのミラノで絵の修行を始めました。当時、北イタリアは、写実的な静物画の伝統があり、そこで写実表現に精通したとされています。

21歳で、ローマに出て当時の人気工房に入り、花や生物の描写を分担していましたが、すぐに辞めローマで極貧生活を送ることになります。当時描いた風俗画が、ローマでもっとも名高い美術愛好家であるデル・モンテ枢機卿の目に留まり、庇護を受けます。

枢機卿の邸宅で、私的コレクションのための静物画や人物画を描いていましたが、枢機卿のはからいで、1599年、コンタレッリ礼拝堂の祭壇画『聖マタイの召命』『聖マタイの殉教』を、油彩画で描くチャンスに恵まれました。教会を飾るための、初めての祭壇画でしたが、絵が公開されると、ローマ中で大評判になり多くの人が、一目見ようと教会に殺到し、カラヴァッジョは一夜にして、ローマ画壇の寵児になったといわれています。

『聖マタイの召命』は、キリストが「私についてきなさい」とマタイに呼び掛ける聖書の一場面を描いているのですが、キリストの顔はほとんど描かれず、建物に斜めから差し込む強い外光が、神を象徴させています。キリストが入ってきた空間は、当時の居酒屋のような場所であり、そこにいる人物は当時の市井の人々を思わせます。聖書の物語があたかも自分たちの生活の場で起こった出来事であるかのような印象を与え、今までの古典主義で描かれた宗教画とは全く異なった斬新な作品となっています。

その後も、礼拝堂の壁画の注文を受け、ローマ最高の画家と呼ばれるようになりますが、短気で狂暴な性格からさまざまな暴力事件を起こします。1606年には殺人を犯して死刑を宣告されてローマから逃亡し、没するまで南イタリアを転々とする逃亡生活を続けることになります。

この間も多くの大作を描き、マルタ島では、マルタ騎士団の依頼でサンジョヴァンニ大聖堂に畢生の大作『洗礼者ヨハネの斬首』を描き、カラヴァッジョ芸術の頂点と言われています。

1610年、恩赦を求めてローマへの旅の途中、海岸に倒れ、38歳で死去します。

カラヴァッジョは、当時の様式化したルネサンス絵画（マニエリスム）からバロック美術へと、西洋絵画の歴史を大きく転換させたと言われます。彼は「最初の近代画家」にして、「進歩ではなく、革新によって進んだ画家」と評価されています。彼の革新性はさまざまな側面がありますが、中核は二つ。

それまでになかった斬新な光の扱いと、理想化を排し、ありのままを描く冷徹な写実（自然主義）です。

カラヴァッジョが、ローマを去ってからも、彼の手法をまねる画家たちが、ヨーロッパ中から集まり、カラヴァッジョ主義はヨーロッパ絵画の流行になりました。

フランドルのルーベンスは、ローマでカラヴァッジョの作品を見て、その様式を発展させ素晴らしい祭壇画を多数描きました。

ローマに来たオランダ人は特にカラヴァッジョ様式に強く感化され、ユトレヒトに帰ってこの様式を展開させ（ユトレヒト派）、17世紀オランダ絵画の黄金時代をもたらしました。レンブラントの内面的な明暗様式も、フェルメールの光への感受性も基本的には、カラヴァッジェスキの延長線上にあると私は考えています。

西洋美術史におけるカラヴァッジョの位置づけについて、私見交えて紹介させていただきました。